

森有礼の師範学校政策

長谷川 精 一

はじめに

森有礼はその文政の中で特に師範学校を重視したが、森の師範学校政策に対して、これまでどのような評価がなされてきたか示すものとして、野口援太郎、藤原喜代蔵、唐沢富太郎の見解をみてみよう。

野口援太郎は森文政下の 1886（明治 19）年に福岡県尋常師範学校に入学し、1919（大正 8）年まで 30 余年間、師範学校の教諭ないし校長として勤めたが、「明治十九年以降の師範教育の変遷」（1922 年）において、次のように述べている。

（森）氏は機敏透徹の頭脳と潑刺有為の才幹とに加ふるに、傲岸不屈の氣象を以て文部大臣の重職に当り、国民教育を以て、国家經營の大本となすべき大抱負を以て、各種文政の改革を企てたが、我が師範教育は、氏にとりては実にその中の一大重要事であつたのである。或る意味から言へば、森氏の師範教育の改革は、実に教育尊重、殊に国民教育の重視であると同時に、又実にその硬化と束縛とであると言つてよいと思ふのである⁽¹⁾。

そして、野口は師範学校での自らの経験に関して、「夫に舎監と言つたら、次第に下士上りの軍人に代つて仕舞つたので、寄宿舍の空気は益々軍隊化して仕舞つた。彼等は何等教育上の思想を有して居るのではなく、何等尊敬すべき人格の所有者でもない。又何等学問の上に造詣が深いと言ふものでも無い。唯無暗に権柄づくで、兵卒をいぢめ上げることに慣れて居ると云ふ廉を以つて、青年教育者を訓練しようと云ふ重職に任命されて居るのである。従つて彼等と生徒との間には何等温情の存する所は無い。唯監視と処罰とが両者の間を繋いで居たに過ぎない」⁽²⁾、「罰則は通常、謹慎、停学、放校などがあり、放校の場合には学資償還が伴つて居た。そしてビシビシとこれらの罰則が実施せられたので、我々憐むべき未来の青年大教育家は、実は内心ビクビクもので、気の弱い私などは本当に嫌で、堪らなかつた。私などより一層気の弱かつた連中は相ついで数名も発狂したものがあることをよく覚えている。嗚呼可憐な青年教育家よ」⁽³⁾と記し、以下のように評している。

師範教育が専ら強圧的に行はれ、専ら教権に屈服せしむる方法を取った結果、すべてが画一的に流れ、何等其の間に個性の展開を許さない、従つて青年教育者を人格的に殺して仕舞つて、皆無気力な、虚飾者、阿諛者たらしめ、徒に智識の仕入売りの徒と化せし

めると同時に、一方気概ある人々には内心不平不満の心を起こさしめ、却って教育の仕事を咀ふ様に、至らしめたのだと云ふ批評は、四方から湧き立って来た⁽⁴⁾。

また、『明治教育思想史』（1909年）において藤原喜代蔵は、（森が）「師範学校に於て、従順規律等の徳性養成を極端に奨励したる結果、従来の卒業者をして因循卑屈、意気沮喪、何等の活気を有せざる奴隸的人物に化せしめ、又徒に形式を喜び、表面の意義を繕うことに汲々して、反つて内面に於ける思想の練磨を忘れ、偽善を以て其身を言すれば糊塗すれば、教育者の資格備われりと思惟するが如き人物を生」じさせたとし、「彼が師範学校を以て官公費制となし、生徒を寄宿舎に収容して、厳に外界の刺戟を避けしめたるの結果、其の卒業者をして、独善的、仙人的、消極的気風に馴致せしめ、実社会に迂闊なる人物たらしむるに至つ」た、「師範教育に於ける此の各種の欠点は、従来実地教育の任に当れる各個の教師が、多くは森の精神を誤解して、積年の弊遂に今日に至らしめたることも、其一因たるには相違なしと雖も、然かも森の施設が爾後の教員をして、終に斯の如き弊風に陥らしめたる大原因たるを否むべきにあらざるなり」と述べて、「彼の功績は、之を竹帛の表に書して、後世に残すと共に、彼の施設上の欠陥も、亦其裏面に録して之を伝へざるを得ざるなり」⁽⁵⁾とする。

唐沢富太郎は、『教師の歴史 教師の生活と倫理』において、（森の）「師範教育に対する真精神も彼とともに生命を失つた。そして彼の築いた師範教育より種々なる余弊をかもし出すに至つた。いわゆる師範タイプとして批判の的であつた教師像も、彼の兵式訓練より生じたものと考えられているのであり、これは当時の師範生の回想録を通して極めて明らかである。それによれば当時の舎監は、嘗て兵営生活に経験のある下士階級の者で、軍隊式に寄宿生活を訓練し、その編制組織はいかにも秩序整然としていたが、それが却つて師範教育改善の失敗の素因となつたと云われる」⁽⁶⁾とし、「実は自習室や寢室にいる上級生の室長が、下級生に対するある一種の優越感を充たさんが為めに、下級生の失態を摘発することが多く、また中には腹黒く意地悪い上級生は、下生の失態摘発を趣味とするというのが如きものもなかった」⁽⁷⁾、「森時代にはじまつた師範学校における余りにも形式的な罰則も、それによつて道徳的な反省を与えるという本来の目的を失し、極めて非教育的なものとなつた」⁽⁸⁾と記している。唐沢の評価は以下の通りであった。

森の意図には良いものがあり、従来の師範教育を一変して近代化し、組織的な充実した教育をなしたことなどは非常に大きな貢献であつたが、しかし彼の意図はそのまま実現されることはなく、そこに幾多の矛盾葛藤があり、またその近代化も日本の国家主義に連らなつたものであり、しかも余りにも極端な軍隊式寄宿舎生活の為め、全国到るところに、恰も期するが如くに師範学校騒動が頻発した。……この森の師範教育に対する精神も、それは要するに国家主義、軍国主義思想に立脚するものであり、ここにナショナリズム、ミリタリズムの教育への侵入が考えられるのである。かくて江戸時代の伝統を

受けて社会の上層に厳然と構え、自他ともに天職観・聖職観を抱いて自負し、また尊敬されていた教師が、明治十三年の集会条例にはじまる政治的圧迫をうけ始めてより、漸次その気風を失いつつあつたが、十八年内閣制度成立とともに初代文部大臣となつた森の断行した、組織的な国家主義的教育、準軍隊的な師範教育は、その後の教師像を決定するに至つた。しかも森以後その形式のみが異質的に受けつがれる面が多く、遂にいわゆる師範タイプとして批難される一面を招いたものと考えるのである⁽⁹⁾。

果たしてこれらの見解は、森有礼文政期の師範学校に対する評価として妥当なものであつたのか。本稿においては、全国各地に残る師範学校関係史料を検討することにより、当時の師範学校の状況が果たしていかなるものであつたのかについて考えていきたい。

第1節 森の登場と師範学校政策

(1) 森以前の状況

森は1884（明治17）年5月に文部省御用係に任じられ、翌年12月に伊藤博文内閣の文部大臣となるが、森が師範学校改革に取り組む以前の各地の師範学校はどのような状況だったのか。静岡県と秋田県の事例を挙げる。

「余の在校は、明治十六年より同十九年に至るの期間にして……師範学校中学校の併設にかり、校舎は勿論職員も亦同一にして、其控室の如きは両校生徒混在し、和氣藹々として談笑に耽り、殆ど同一学校生徒の観ありたり。……寄宿舎は師範生徒の専用にして、主として地方生徒の収容に充て、市並に付近の者は通学の制に依る。……寄宿舎と云ふも名のみにして、今日の如く自習室寝室等の区分なく、十四畳程度の間に四、五人同宿し、昔時の塾室と何等撰ぶ所なし」⁽¹⁰⁾。

「服装は随意で和服の者ありその服地も仕立も種々様々でありました。又寄宿舎に居る者もあり、下宿する者もあり、私は自宅より通学いたしました」⁽¹¹⁾

「服装は先生も生徒も皆和服、そして無帽であつた」⁽¹²⁾。

「舎監は職員中から一人毎晩泊りに来ます。外の時は殆んど見廻りませんが、夜分丈は生徒の就寝時間後一回必ず小使いに提灯を持たして廊下を通つて歩きました。冬分になると室内では木の四角な箱にのせた釜火鉢にクワンクワン炭火をオコしてアタつて居たのを寝るときは大体火を消して皆廊下に出して置くものですから舎監の巡視と言つても言はゞ火の用心位のものでしたらう。朝起、就寝、食事、外出、門限など時間に制限がありましたが、余り嚴重なものではなかつた様です。室の掃除は生徒がやりますが、ランプの掃除は賄方の炊夫がやつて各室に配つて呉れた様です。入浴は町の湯屋に出掛けたものです。湯上がりの帰りにはよく県庁前の那波の向の榮太楼とかいふ汁粉屋に行つたものです。……夜分は出られない事に極まつて居ますが仲々そんなおとなしい者ばかりではなく、所謂脱屣といふことをやつて町に遊蕩に出かける連中があつたもので、私なども度々やつたものです。夜分突然に舎

監が来て人員を調べられると寝具さえ伸べてあればそれで胡麻化しが利きます。中には枕に頬被りをさせてサモ誰かゝ寝て居る様に見せるものもあり、又念の入った計画になるとわざわざ他室から友人を連れて来て顔を後ろ向にして自分の床に寝て貰ふのです、所謂替へ玉を使ふのです。其の友人の室で空床を発見されると同室のものが本人は今便所へ行つたとか他室の友人と同食して居るとか言つて論より証拠呼びに行つて連れて来て首実検に供するのですから是には嘘も詐りもないのです。寄宿舍内で隠れてボタコで酒を飲むなどは公然の秘密でそんな事を彼はいふ室長を聖人と呼んで皆之を敬遠排斥したものです。或時昨夜飲み空らしの貳升樽（其頃の酒入は木製の樽）を片附けるのを忘れて室の隅に置いてあつた所へ突然舎監が修繕箇所の調べか何かに廻つて来たのに見附けられ「それは何だ」と詰問されると余りの不意打に困つて仕舞ひ、室の者が醤油樽ですと答へると、舎監はそれなら其処に置かぬ方がよいと言つて笑つて帰つたといふ滑稽談もあります。或は犬を殺して食ふとかいふ乱暴者も居りました。賄征伐の飯食事件などは年中行事の平凡な余興で何も珍しいことではなかつたのです。兎に角其頃の生徒の生活は今から見ると下級低級なものでした……料理屋に行つて酒を飲むなど、いふ事も今のカフェーで飲食する位のもので時々他校の生徒と喧嘩なども始めたものです。……元の秋田師範学校時代は教師も生徒も現今に比べると随分無頓着であつた様に思ひます。生徒が外出して料理屋に行つて酒を飲むなど、云ふことは別に禁ぜられてはなかつたと見えて時々土崎の池鯉亭といふ料理屋などに行つてまだ子供餓鬼の癖に芸者を呼んで飲み食つたものでした。先生達にしても酒を飲むには芸者を相手にするのは当然で何も不思議はなかつた様です。誰先生は何町の何処へ出掛けたと云ふような事は普通平凡な事で誰も何とも怪しむ者は無かつたのです」⁽¹³⁾。

(2) 森の改革と師範学校の日常

森の改革による寄宿舍生活の変化に関して、秋田県、福岡県、愛媛県の各師範学校生の回顧をみてみよう。

「森有礼大臣時代の秋田県尋常師範学校からは何から何までずつと変りましたよ。私も是に二年半か生徒生活をやりまして所謂信愛、威重、順良の三氣質が鍛え上げられた一人ですから二三の記憶を辿ります。抑々も師範学校の生徒職員が洋服姿に制定されたのは十九年で、此の頃の改正で師範学校の教育は軍隊式になつたのです。寄宿舍は是迄の豚小屋式の生活を改めて寝台に毛布となり、学校の東半分が自修室（下部）寝室（二階）となり、西半分が……教室となり外に女子部を設けて其の寄宿舍を元の男子の豚小屋式寄宿舍を改修したものを以て之に充て朝夕の寝起、学科時間、食事時間、外出門限等一切ラツパで合図をする。イヤハヤ規則が嚴重で何も彼も規律一点張り、一挙一動元の放埒生活をやつた私などは実際苦しみましたよ。外出も一週三度か四度で、其の時の服装などは仲々やかましいものです。やれボタンがはづれたの帽子が曲がつたの、靴のヒモが解けてるのといふ始末で小言を言はれる。寝室では洋服シャツ靴下等被服の畳み方、重ね方、寝具の整頓悉く物差でキチンと定め

られる。自習室では本、硯箱、文具の置き方並べ方も亦其通り、何でも彼でも清潔、整頓、規律、命令で責められる。生徒には組長、伍長、学友など、いふ者が出来、命令で威重を示し順良で服従する。が信愛で仲よく親切にする……といふ主義方針、私など組長をやらせられましたが、今から思ふと馬鹿らしくもあり、恥かしくもあり、冷汗が出て来ます。夕食後夜になると黙学時間といふものが二時間が課せられる。此時間中は如何なる事があつても離席は絶対に出来ない。音を出す事は絶対に禁じられて居るから引出を開けて中から物を出すこともクシャミや咳をする事も出来ないのです。時々舎監がコッソリ巡つて来て一々生徒の勉強振りを見て巡る。黙学時間中は私信の手紙を書く事は許されない。一意専心学科を勉強するのです。……夜中熟睡してゐる時に不時点呼といふ事をやられる。ラッパが鳴ると飛び起きて暗い寝室で敏速に服装を整えて銃剣を帯びて校庭に整列するのです。一番早く出ると賞められ、後れたり服装が整つて居ないと叱られるといふ始末。時々校長共他の教員が見えて時としては其何処かに引率された事もあつた様です。滑稽な事には今夜不時点呼があると誰言ふとなく予感を言ひ降らすとズボン、ゲートルを付け、靴を穿いて寝る様な用意のよい連中もあつたのですが、見込が外れて朝まで窮屈して碌に睡れず夢の代りに馬鹿を見る事も度々あつたのです。十九年の改正当時は一切合切官費で被服、食料、学用品は勿論、補綴用の針糸まで貰つた様です。其の外一週間に拾銭宛の手当もあつたと思ひます。私などは卒業後数年間半紙墨ペン先、フールスカップ、其他大分使ひ残りが有つたものです」⁽¹⁴⁾。

「寄宿舎生活はすっかり変わった。頭は五分刈となつた。服は小倉織のジャケット服、帽子は軍隊と同じ独逸帽、外套、靴、靴下又は文具に至るまで一切官給品であつた。舎内の整頓掃除の苛厳な事、器具の排列方、布団毛布の積み方は前面の角は垂直でなければならぬ。畳の上に塵一本の散在を許さぬ。舎監の検閲が時々行はれる。鴨居の上を撫で、其微塵を払はすなど、水も漏らさぬ監督振りであつた。飯は麦飯とメンコに変わる。一方兵式教練、強行軍の鍛錬が励行される。附属の児童は男児は蹴先の運動、病気の外は足袋、袴下、襟巻を一切禁止した。女子には袴を奨励した（後には一般的となつた）。校長、諸先生も皆詰襟服に制帽だつた。因より高圧的に一から十迄全く軍隊生活に急変した。此未曾有の革新に対して在来の生徒は随分不平や愚痴をコボしたが追付かない」⁽¹⁵⁾。

「舎監の丹羽先生……此の先生は恐い先生であつた。自習室や寝室の生活、食堂の生活は言はずもがな、理髪所、入浴場さては運動場、道場に於ける生活に迄、細微なる注意を個人個人に配られて厳格なること一と通りではなかつた。僕輩広野豆の煎つたやつを風呂焚の男に買つて貰つて自習室で失敬して居た時でも廊下に靴のかがとの音が響くと震ひ上つて書棚の下空所へ袋のまま押し込んで……といふ塩梅、吸煙室でさへ高い声で話すことをも遠慮した位であつた。寝室自習の書籍寝具衣服机腰掛其他化粧品品の清潔整頓振りの八釜しかつた事も一と通りでなかつた。之に加えて生徒中から選ばれた小団長、半小団長、分団長（全校を二小団四半小団八分団に分かたれて居たと思ふ）などが先生の意を体して忠勤を擧げづるの

であるから軍隊生活と全く同様とでも云ひたい位であつた。『丹羽先生ッ』之は『恐ろしいぞ』といふ言葉に代る名辞であつた。斯うして三カ年半（僕等は三カ年半の在学であつた）鍛錬せられた影響、それは卒業以来今日に到るまで僕の生活を規定して居る。今も現に規定して居る」⁽¹⁶⁾。

続いて、森の政策を特徴づける行軍、修学旅行、運動会についての記述を挙げる。
「陸軍も近衛師団を合せて全国七師団に過ぎなかつたから、軍隊を見る機会は静岡には殆ど無かつた。だから『鳥無き里の蝙蝠』で、我等の兵式体操は中々珍しがられた。今の修学旅行は『行軍』と呼ばれ、大抵武装で且途中で発火演習もした。而も銃はエンピールとか言ふ先達の随分旧式の廃銃であつたが、我等は東京の真中まで大威張りで之をかついで歩いたなど、稚氣愛すべきものであつた。文部省視学官（今の督学官）の巡視があると、臨時に必ず二時間位、兵式体操を御目に掛けたもので、行軍に同行せられた例さへあつた」⁽¹⁷⁾。
（明治 19 年）「此年始めて我簸川郡に行軍（修学旅行とはいわず）して、今市を経て杵築泊、翌日両町の間で対抗演習をやつたが大捷、籠手田知事は大喜びで、揖屋まで出迎へられた。『三月の月拝みつゝ七つの難も八の苦も願ひ叶ひし心こそ丈夫武雄の鏡なれ』との軍歌を作つて、帰路高唱させられた」⁽¹⁸⁾。

「夕闇迫る校庭で軍歌の稽古——晩食もすんで、暮靄藻岩山麓を籠め、夕闇が迫つて来ると、附属の運動場で軍歌の稽古が始まる。「あゝ正成よ正成よ」とか「我は官軍我敵は」とか云ふやつを、四列縦隊で、運動場をグルゝゝ廻りながら三十分位も怒鳴る、何しろ町では軍歌など始めて聞くのだから、ソラ軍歌が始まつたと多くの人が、山の様に集まつて来た。兵式体操の銃は、屯田兵司令部から御下げの古物だ、田原坂の合戦にでも使つた様な、エンピール銃をかつぐ奴もあれば、スナイドルを持つて並んで居る奴も居る。レミントンなどと云ふ銃もあつた、エンピールは元込め銃で、全く博物館ものだ、今じゃ満州の匪賊だつてソナナ物のはも持つて居るまい、嘘の様だがホンマの話だ」⁽¹⁹⁾。

「岩手県尋常師範学校第一回行軍記

緒言

今回の行軍は、本校の創始に際し、諸般の準備尚全からざるものありと雖も生徒をして學術に関する所在の事物を観察せしめ、之を統ぶるに兵式を以てし、以て其思想を鋭利ならしむることを趣旨とす。故に到る処の郊村都邑、皆学校に於けると一般、其規律風紀は最も之を厳粛にし、兼て注意観察の用意と臨機応変の運用とに習練せしむることを務め、上下相親み、同輩相愛し、苦樂を共にし、好悪を同うするが如き、彼の社会邦家の源基たる同情の徳性を扶植培養するが如きも、亦此行に在り。

此行の生徒は五十名にして、之を統導する職員は七名、即ち石原学校長補・梅村教諭・山内幹事・太田助教諭・北村舎監・富田舎監（二名、助教諭試補兼）・小林書記・是なり。又、之に随伴する所の傭丁は、喇叭手二名・校夫一名にして、総員は六十名とす。

此行に於て演習する所の学科は、動物鉱物・地理・歴史・風景・測図・兵式演習にして、……また、行軍沿道の村落・都邑に就て、学校・人口・戸数・壮丁・車数・道路・官衙・寺院等の調査をなさしむるために、生徒中より特撰して一人を先発とす。……

此行は、県下紫波郡郡山駅、稗貫郡花巻駅、西閉伊都下宮守駅、同遠野駅、南閉伊都郡釜石港に到り、稗貫郡大迫駅を経て帰校す。往復路程六十二里、日子は十二日を費せり。而して其宿泊所及び休憩所等は、予て所轄郡区長の幹旋に拠りて便利を得しもの少なからず。此れ深く謝する所なり。又、沿道の戸長、教員諸氏の厚き待遇を受けんこと少なからず。是も亦深く謝する所なり。

此行の費用は、職員・生徒及び傭丁一人一日金十三銭とし、駄馬一疋・人夫一人を雇ひ、其費用一日平均凡そ五十銭内外とす。

此行に携帯せる学用品は、植物採集器・動物解剖具・写景・測図用具等なり。此他携帯すべきもの少なからずと雖も、費用に限りあると器具の備わらざるとに由り、之を軽減せり。殊に生徒用「ランドセル」なきは、尤も遺憾にして不自由なりし。

行軍中は凡て銃剣を帯び、総生徒を一小隊に編制し、之を分ちて四分隊とし、小隊長は富田助教諭試補にして、半小隊長及び分隊長は生徒中より特撰し、宿泊には半小隊長若しくは分隊を以て一所の定員とし、本部を置いて之を総管する等、凡て兵制に拠るものとす。

行軍中、発程・起臥・食事・外出・人員検査等の時限を定むること、左の如し。

発程用意（晨起）	午前	五時
朝食	同	五時三十分
発程	同	六時
夕食	午後	五時
外出時限	同	七時
人員検査	同	八時三十分
消灯就寝	同	九時

但し、宿泊一ヶ所に定むるときは、発程用意の時限を午前四時三十分とす。又、本校発程は、此限りに非らず」⁽²⁰⁾。

「七月三日水曜雨天、午前四時半起床、七時二十分浦和駅発、十一時廿五分黒磯駅着、午後零時十五分同処発、四時五十五分那須村大字湯本着、小松屋に泊る、一行職員九名、生徒八十八名喇叭手一名、炊事取締一名、炊夫六名、計百五名。

四日木曜細雨、休業随意散歩

五日金曜雨天休業

六日土曜晴天、午前つむじ平に至り、甲乙二組に分れてエンピール銃による音伝達時間測定を行ふ、後散兵演習、フットボール、ベースボール。

七日日曜晴天、硫黄採掘坑（殺生石）及び温泉の源井に硫黄製造所に至り見学、温泉の温度

測定を行ふ。

八日月曜晴天、弁天の湯大丸温泉北の湯に至る、泉温測定或は定性試験を行ふ。

九日火曜雨天、那須神社に至り古器物及び書類を見る。

十日水曜雨天、水の沸騰点、線香の燃焼時間、気圧等の試験を行ふ。

十一日木曜雨後晴 つむじ平で東西両軍に分かれ発火演習を行ひ、後射的を行ふ。

十二日金曜雨天、午前七時出発、十時茶臼岳頂上に達す。

四年 岳頂上の気圧及び温度を測りて山岳の高度を計算すること、噴出瓦斯の性質及び温度を試験すること。

三年 水の沸騰点を検査すること、麻痺涅叟母の燃焼を観察すること。

二年各火坑の縦横の直径及周囲並に深淺を測ること、山頂の全図及噴火坑の製図。

一年噴火坑へ石を投し其底に達する音響を聞きて其深さを計算すること。

午後一時試験終り降岳、三時四十分湯本村着

十三日土曜雨天、二年乙組射的を行ふ、午後六時田原舎監による琵琶会を行ふ。

十四日晴天、つむじ平にて競争射的を行ふ、つむじ平の山の高さ測定す、後校長の修学旅行の講評あり。

十五日晴天、休業随意散歩、夜六時より琵琶会、曲は殺生石。

十六日火曜晴天、午前三時起床、五時出発、九時卅分黒磯停車場着、十時五十一分同処発、午後二時卅四分浦和停車場着」⁽²¹⁾。

「当日は知事前田正名の訓辞を受け、教頭亀井義六指揮のもとに全員軍隊の行軍様式に等しく、ランドセルを背負い、ゲートル姿に銃をかついで、富士川を下り、静岡県吉原町に一泊、吉原ー原ー三島一泊。箱根山を越え、湯本泊まり。この時箱根の險三里を任意競争（マラソン）ー藤沢ー江島鎌倉泊まり。翌日森文部大臣が藤沢で本校生徒に面謁を許すとの報に、夜半出発、雨後の泥濘中を藤沢に行き、森文部大臣に駅頭広場で柔軟体操を見てもらい、頌詞と蜜柑十数箱を与へられ、のち一場の訓辞を受けた。汽車に乗りー横浜に一泊。翌日小蒸気船で横須賀へ。軍艦筑波見学ー東京二泊。諸所見学ー浦和、埼玉師範学校見学ー帰途についた。当時中央線は八王子までトロッコ車が通じてゐて、学校の生徒といふことで許可を得て乗車。八王子一泊。在京中特許局長高橋是清の訓話をきいた。当時としては全国的にまれに見る大旅行であつた」⁽²²⁾。

「明治二十一年十一月二十一日近衛諸兵の對抗不期運動天覧並觀兵式御挙行の爲め 聖上皇后宮兩陛下当浦和宿行幸行啓在らせらるゝに際し本校生徒の兵式操練及障害物競争を天覧に供せり初め 聖上 皇后宮兩陛下の行幸行啓在らせられんとするに方り文部大臣に就きて請ふ所あり此日午後三時師範生徒及附属生徒は校長以下職員を率て兵式体操場に集合して御乗車を待つ暫時にして御乗車汽車少しく進行して体操場の正面に至りて停る此時敬礼終て師範生徒を三組に別ち一は中隊運動一は小隊運動一は障害物競争を演習し附属小学生徒は傍ら

に在りて君ケ代金剛石及軍歌等を歌ふ此間畏れ多くも 聖上には汽車の御窓を開かせられて久しく御覧遊はさるゝの折柄文部大臣には御窓の側に侍して本校の情況体操の次第等を詳に上奏せられ又御発車の際には諸運動を中止し敬礼を為して奉送す生徒の兵式操練を天覧に供すること如此誠に千歳の一遇にして本校の光栄極りなしと云ふへし本校は一に此栄を荷ふ焉そ忠君愛国の至情を涵養することを勉めさるへけんや特筆大書して之を記念と為す」⁽²³⁾。「本日は近来稀なる快晴にて暁来一点の雲を見ず各郡生徒は其便路に沿ひ早朝より繰出し各予定の位置に屯習し午前十時烟火の号音に従ひ四囲に整列し地方官の臨場を待て観列式を行ひ之に次て各部交番中央に出て、演習を始め烟火の号音にて午饗暫時休憩の後更に演習をなし午後三時完了せり余興として数頭の家猪を放ち生徒をして駆らしめ了て午後四時何も隊伍を整へ原位に復し数発の烟火を合図にして漸次軍歌を唱て引揚たり其運動は大中小隊諸操練を主とし兵式体操を交へ又師範生徒は別に中隊散兵発火演習をもなせり之を前年の秋期運動会に比すれば規律の厳正動作の練熟活発なる著しき進歩を表せり又臨場せしは県官郡区吏学校職員町村吏招待員には陸軍将校裁判官等数百人にして其他縦覧の人多きは近年稀に見る所なり」⁽²⁴⁾。

師範生の「操行査定」に関しては、岩手県尋常師範学校の「生徒操行評判方法及申報手続」(明治二十一年三月制定)は、査定の際の基準となる項目として、順良・信愛・威重、規則の遵守、命令示達の履行、学友交際の情況、役員勤務中の統御及整理、勉強、言語、風儀、器具被服の保存及諸般の整理、食堂及浴室中の挙動、晨起就蓐出入及臨時の挙動、衛生の事項、課業の注意、発問・応答・言語、容疑及姿勢、礼節、座作進退、教科用具の整頓、出席の遅速、児童の統御、教室の管理、事務の整頓、教務の勤勉、遊戲の巧拙、遊戲の快活遅緩、遊戲の善悪を挙げていたが⁽²⁵⁾、福島県師範学校においては、以下のような例規及び細則が定められていた。

「福島県尋常師範学校生徒操行査定例規

廿一年二月廿日訓令乙第九九号

- 第一条 尋常師範学校に於ては生徒平素の操行を夷考して優等尋常の二等に定むへし
- 第二条 操行を査定するには評点を以てし卒業の際在学中の操行を夷考して行狀端正志操確実なる者と之より下る者とを分ち左式の証書を授与すへし
- 第三条 操行査定に関する方法は校長之を定めて開申すべし

福島県尋常師範学校生徒操行査定細則

- 第一条 生徒の操行は氣質彩才幹の二種を以て査定す
- 第二条 氣質を品評するには高尚野卑、公正偏頗、温順執拗、寛宏宏狹、剛毅懦弱、篤実浮薄、深軽躁恭謙、傲慢細密、粗鹵整齋、放縱勤勉、怠惰堅忍、沮撓、進取因循、活発緩慢等を夷考し才幹を品評するには推理力并に判断力の強弱、統制の能否事務を処するの巧拙及敏

捷機知の如何等を夷考すべきものとす

第三条 気質才幹の品評は点数を以て之を表し各一百を定点とし気質品評点の二倍と才幹品評点とを合算し之を三倍したるものを操行品評点とす

第四条 教員は毎年三月生徒の操行品評表を製して其月十五日限教頭に差出すべし教頭は教員の品評点と自己の品評点二倍とを合算して之を教員の数に二を加へたるものを以て除し其得数を一学年の甲種品評点とす

第五条 舎監は毎年三月生徒の操行品評点表を製して其月十五日限り幹事に差出すべし幹事は舎監の品評点と自己の品評点一倍半とを合算し舎監の数に一半を加へたるものを以て除し其得数を一学年の乙種品評点とす

第六条 甲種品評点と乙種品評点一倍半とを合算し其二倍数を五除したるものを以て一学年の品評点とす

第七条 第四学年末に第一学年品評点と第二学年品評点の一倍半第三学年品評点の二倍第四学年品評点の二倍半とを合算し之を七除したるものを以て在学中の品評点とす

第八条 学校長は毎学年の品評点に関し必要ありと認むるときは評議会に附して各員の意見を諮ひ其決議に依り点数を増減することを得

第九条 在学中の品評点九十点以上を得たるものを優等とし八十九以下六十以上を得たるものを尋常とす

第十条 一学年の品評点六十に満たざる者は退校せしむ」⁽²⁶⁾。

続いて仮入学制度についての記述を挙げる。

「明治二十三年三月十日（日曜）午前九時頃仮入学生集れの召集令、集まりて二組に分ち一組は教室にと教諭につれられて出て行き残り一組は教諭より不許可の申渡がありてそれゝ、室に帰り荷物を取り纏め帰郷の用意。入学を許可せられたるものは校長よりそれゝ、訓辭を受け、誓約書保証人などの事にてにこゝ、ものであつたが、一方不許可の者に対しては気の毒で何の言葉もない位であつた、自分も若し不許可なれば他に道を求むる様覚悟はして居りし」⁽²⁷⁾。

「聞く所によれば、師範生が入学の始めに特に試験生という奇怪なる名称を以て特別の注意取扱の下におかるゝ際は、人情の弱点として如何にもして此の難関を通過せんものと工夫し、徒に実着らしく振まい、温順らしく仮装し、舎監にへこつき、上級生に媚び、実にいふに忍びざる卑屈心を養成し、慨きても余りある虚飾の弊を生じ、従ひてそのまた一旦本入学の許可を得るに及びてや、さきに温順らしきものは大に執拗となり、頑硬となり、さきに着実らしきものは横着となり、怠慢となるに至るもの比々皆然りと 嗚呼是所謂法の弊にあらざるか」⁽²⁸⁾。

師範生たちは以上にみたような規律を重視する寄宿舎生活送っていたが、寄宿舎から脱出する機会であった休日の楽しみを次のように回顧している。

「寄宿制のならひととして身は恰も籠中の鳥、一週日の苦しい学科にいそしむもの明日は日曜安息日、朝から外出を許されたるもの三々五、相伴ひ相語りつ、春は花咲く猿沢池畔、空きは鹿啼く東大寺辺、以て浩然の気を養ふものあり、あるは今御門、池の町辺りの旅館に下宿と称へて同志相集りおのがしじ娯楽に耽り読書に親しむもの亦尠しとせず」⁽²⁹⁾。

「然もかゝる中にも自ら楽地のあるものにて外出時には三番町の下の方にて生徒間に愛慕せられたる老婆の家に盛に汁粉や餅菓子喰ひに行きたるものありしが時には風呂番を買収して私に腹鼓を撃てるもあり或は物産陳列場に僚友のもたらせる餅包を開き月を眺めて太平楽を極め込む連中のなきにしもあらざりし」⁽³⁰⁾。

「外出日には普通は其の級の倶楽部へ集まつて安息し娯楽したもので倶楽部と云ても只或家の間借をした極めて簡易なものであつた倶楽部以外で繁昌したのは上之町の餅屋で何時も外出日には入口に師範生の靴が沢山ならべられて居た其の餅屋が阿部の撃剣道場の前にあつたので其の餅屋のことを誰言ひ出したとなく「ビホアー」と呼んだ（阿部の前の前一字を英訳したもの）此の「ビホアー」は季節によると時に寄宿舍内に密輸入されたものである夫れは寄宿舍の裏の農場を管理する農夫の細君が奇妙に赤い鼻の持主であつたので綽号を「レッドノース」又は略して「レッド」とも云つた「此のレッド」の媒介で夜間こつそり運ばれた然し之は上級生のすることで新入生は其の仲間にも入りかね哀れにも只人知れず唾を吞込忍んだ苦しさも亦記憶から全く取り去ることは出来ぬ」⁽³¹⁾。

「然し愉快な事も随分多かつた、晚餐後の草原会議（運動場の芝生の上で寝転んで話をする）も随分面白かつたが、最も楽しかりしは日曜日の外出である、土曜日に大掃除を済して舎監の検閲が終ると週番から十銭（謂ふ勿れ唯の十銭と当時は白米一升代五銭以内なりし故現今の八九銭に当る）を給与せらる、之を懐にして同期生の倶楽部として居つた、丸亀町や野田屋町辺の下宿屋に至り、或は方言高談或は口腹の欲を恣にす時には又意気投合の共を語らひ、操山又は後樂園金山半田山等に登攀し、三幡辺迄も歩を延ばして遊びまはる事であつた今思ふも中々愉快である」⁽³²⁾。

（3）師範生たちの評価

それでは、師範生たちは師範学校での生活に対して、どのような評価をしていたのか。まず、消極的、否定的な評価の例を挙げる。

「マァ十九年の森式改正師範学校教育は当時一大改革で日本の今日の教育の基礎を作つたものですが、規律命令一点張で通した為に追々となつたらぬ教師迄が命令で生徒を押しつけるやうになり、それから猫をかぶつて生徒の前で許り教育者気取りをやつてゐる偽せ物が多くなつたのは全く此の改正に伴つた余弊であると思はれます。日本の教育の行詰りと云ふ最大原因は森式教育の伝統的、因襲の結果であると言つても誣言でないと思ひます」⁽³³⁾。

「私達の入学は、明治二十年四月十五日なり、明治二十年と言へば、師範教育に画期的大改革の行はれたる年にして、本格の軍隊訓練に入り、服装は洋服となり、自習室は椅子テー

ブルとなり、寝室は寝台となり、時鐘はラッパとなり、私達は立夏休みに洗濯仕立の真白い小倉服にゲートルを巻き郷党に対し軽いプライドを感じたるものなり。……（教師たちは）多士済々孰れも懇篤熱心に教授指導を賜はり、私達は斯くてこそ私達が教育報国の重任を負ふべく運命付けられたる責任を感じ感奮興起したものなり。意気や壮なり。

かゝる雰囲気には於ては、私達学生は何等の不安なく天下泰平に懸命の勉強が出来たこと、思はるゝが事實は然らず、私達には若干の悩みなかりしにあらず。

その一 教育が画一的詰込主義なりし事

その二 生徒の訓練軍隊的訓練の衝に当る指導者の人を得ざりし事なり。当時寄宿舎に舎監なる職員あり。二名の舎監が更迭に宿直して生徒と起居飲食を共にし、生徒を訓練し監視し且つ批評して人物の等級を附しての人物評が卒業後の待遇を左右する制度にして、舎監は実に重要な師範教育の職制なりしなり。然るに舎監なる人々は上流の教諭にあらず二人共陸軍の退役下士して、青年学徒の師表たり指導者たる素養なく素質なく、単に軍隊にて仕来りたる階級的命令的に行はれたる営内生活を、その俣に学生心理の了解もなく理解もなく只管寄宿舎内に行はんとしたるものなり、その成績や知るべきなり。

その三 先生方の待遇素質に非常なる差等あり。下級教諭の或る部分には自己の受持課目の生徒成績を見る自信なきもの、如く職員室の茶飲話に於ける上級教諭の批評のまにゝ、自己の受持課目の点数を左右せらるゝ疑あり。学生の砂上偶話が、多くこんな事より発せられ折角の軍隊訓練の効果を収むること能はざるの憾みなしとせざりしなり」⁽³⁴⁾。

「起居進退総て喇叭の合図、三度の食事就褥起床時の人員点呼夜分の自習時間（一語も禁止）等厳格な規律の下に行動するが何となく嬉しくもあり窮屈にもあり一種異様の感があつた。……家庭に在りしころの自由に引替へ軍隊式規律の下に於ける行動が自ら真実なる心を顕現すべく環境に置かれたと後で思つた。消燈喇叭が長く尾を引てタ、タ、ターと響くのが寂しく慕郷の念を呼び起こすのであつた、気の小さい者はシクシクと歎いたものもあつた、余り自由に育つたものは窮屈に堪へないで自暴自棄となつたものもあつた」⁽³⁵⁾。

しかし、師範生たちの残した評価はマイナスのものばかりではない。師範学校での生活に対する以下のような積極的、肯定的評価も各地の師範学校で見られる。

「師範学校時代のことを今から考へれば、一生の内でも最も楽しくまた最も緊張した生活をしたやうに思ひます。私は入学当初から高等師範に入学希望があつたので随分勉強もしましたが、また運動が好きで課外に撃剣をやり（その頃は柔道はなかつた）日曜祭日には友人と共に山登り、遠足、名所旧蹟を探りなどして実に楽しかつた事を思ひ出します。また寄宿舎生活には一定の就寝、起床の時間があり、規則正しい生活が出来たので衛生上良かつたと思はれます。

その頃の学費は全部支給され、食事、衣服類、教科書は勿論、靴、靴下、シャツ、筆墨紙に至るまで公費で、鉛筆などは残つて卒業使つた位である。その上小遣錢（毎週十錢）が貰へるので私は在学中自宅から一文も貰つたことはありません。しかしその当時は物価も安くあつたが儉約して漸く小遣錢が足りるといふ程度で、饅頭食べたいと思ふても金がないので焼き芋を買ふて食べたこともあつた。それでも今から考へれば誠に有り難いことで、公費の師範学校があつたればこそ学資金の乏しい者も学問が出来たのである。今ならば県内に沢山な中等学校があり自宅から通学出来るが、その頃は郡山中学校が一つあつたゞけで、明治二十年に吉野中学校が創設されたがそれも後に廃止された。また今に思い出して感謝してゐることは師範学校の食事である。その頃の奈良県の田舎の食物は朝晩は粥（麦入り）と野菜の漬物、昼は麦飯に野菜煮、時に塩鰯かニシンを食べる位であつたが、師範学校は三度とも白米飯、朝も味噌汁あり、昼晩は野菜だけでなく豆腐、油揚げ、コンニャク、魚肉等何かあるので美食であると思ふた。その御蔭で身体も大きくなつたのかと感謝してゐる。私も師範学校の御蔭で立身出世も出来た」⁽³⁶⁾。

「さあ是れよりは敬礼の仕方が悪い、ギルドの履き方が悪い、書物の排べ方が悪い、鉄砲の磨き方が悪い、服は何寸と何寸に畳むべしと、尺度を持ち来りて検査をなすなど、所謂箸の上げ下げまで小言を言はれたものである。勿論門限外に夜間外出の出来るものにあらず、頗る厳格なる鍛錬主義の下に訓育せられたのである。今日の如き自由人格主義とは天地の差がある。然し吾々は此鍛錬主義の教育のために心性を磨励し如何なる困苦欠乏にも頓着せざる性格を養成し得たのは今にして幸福でありしことを感ずることが深いのである。教育は寧ろ厳格なることを要するにはあらざるか。ある時文部視学官某といふ剛の者が巡視に来られた。丁度雪消の泥濘中に於て体操を課し検閲せられた。其時吾々一同は衣服一着を殆ど泥まみれになし了つた。視学は見て以て得意となし居られた。凡てが此様の風で火の中でも水の中でも、遠慮なく飛び込めといふ風の教育であつた」(傍点は原文)⁽³⁷⁾。

「在学当時の文部大臣は彼の有名な森有礼氏であつたから総てが兵式で寄宿舎内の規律は厳しく正しいものだつた。自習室は四つあつたが室内には什長一名伍長二名がゐる部下を統率すると云ふ厳格さである、什長は胸間に赤字に黄の輪郭をした星形の径二寸五分位の大きな徽章を佩し、伍長は赤の星形の徽章を佩し、週番の什長や伍長は右肩から腕へ数條の赤の紐を掛け威風堂々たるものであつた。然し唯こうした形式が八釜しく整つたばかりでなく、實際万事が内的にも規律正しく真面目であつて克く勉強もし精神も鍛へられたものである」⁽³⁸⁾。

「予は明治十七年当時中等師範学科に入学したのであるが同十九年学制改革の結果解散の運命に接した次第であつた同年中一般的に入学試験が行はれ予は幸に合格して尋常師範生として教育せられ明治二十三年三月第二期卒業生として本県教育界に送られた者である。……
(一) 学生の氣風 予の初めての師範生は明治十七年であるが当時の風紀の廢頹せること実

に言語道断とも云ふべきで寄宿舎杯の如きは全く形容すべき言葉がない位であつた。若し十九年の改革に於て他の府県の如くあの生徒を引続くことがあつたら恐らく其の病毒の浸害する処量り知るべからざるものがあつたであらう。果たせる哉関藤成緒校長の活眼達識は断然として突如解散の厳令を宣告して教育更正の道を開き志気作興の機を明かにせられた全校一時は其の急変に驚き其の将来に失望せるも又如何とも策の施すべき余地なくさながら驟雨一過して清新の氣漲れるの壯觀があつたやうに覚えて居る。特に一言し置くの必要はあるが受験の上入学を許されたる者の中解散前の生徒にして再入学したる者僅々三分の一内外にして而も入学後六ヶ月間は仮入学としてその成績によりて始めて本入学を決定せるが如きは誠に旧来の惰風を一掃したる一例として見るべきである。(二) 教育の刷新 さて愈々新師範教育の開始せらるゝや教師の更迭は勿論刷新教授法の改善等全く清新の氣に充ち満ちていた。殊に順良信愛威重の三氣質養成は師範教育革新の基本方針であるから其の方法の唯一なるものとして軍隊式を採用すると共に兵式体操を偏重することは今日の想像だにも及ぶ処でない。全体の生徒は伍長、什長、組長の組織によつて編成せられ平素自修室と寢室とを區別して整頓し武装検査、不時呼集、行軍等頻々続行せられて全く息つく暇がないと云つたやうな感じがしないでもなかつた。然し決して詰らぬ不平を懷いたり舎監や教師に反抗を試みたりするやうな不規律や不秩序はなかつた。今日の学生から見たら意気地なしの骨頂と見えるかも知れないが自慢ではないがその代り今日の学生共に見られない古武士的の意気は旺盛であつた」⁽³⁹⁾。

教師と生徒の関係に関しても、師範生たちの肯定的な記述が残されている。

「先生を尊敬し親しんだ 私達の時代は先生も生徒も少数であつた為かも知らんが、先生と生徒又生徒と生徒との間は羨ましい程親睦にして常に克く結合し楽しく暮らしたものである。従て授業も座談的に親しく行はれ、教授も学習もよく徹底し實に行届いたものであつた。折々は先生の家を訪ねてご馳走にもなり修養談も聴いて楽しんだものである。赤くなるなよ、カフェーに行くなよや当時そんな言葉はなかつたが、尊皇愛國論はよく聴かせられ舎内で演説会を開く時は申合せたやうに尊皇愛國論を絶叫したものである」⁽⁴⁰⁾。

「教師生徒間の情誼は余程厚かつた、今に記憶に残つて居るのは、慥か二年生の時であつたと思ふ、木村繁四郎先生が転任せらるゝ事が発表になり、送別会が開かれた時の如き参列者一同涙に咽んで、発言する者なく唯すゝり泣の聲のみを以て送つたといふ様な事もあつた、神経過敏と評する勿れ、全く子弟間の情誼が精神的であつた証拠である」⁽⁴¹⁾。

「廿二年末私等卒業の時式後職員一同から卒業生全員招待を受け講堂に於て鄭重なる御馳走になり談笑湧くが如く夜に及び別れを惜んで各下宿に歸つてあつた。又卒業生一同は職員全部を秋田倶楽部に招待して謝恩の宴を催し、互に胸襟を開き往を談り来を談じ深更に及んで解散してあつた。常には規律を持すること厳格であつたが師弟の情誼の温かなることも亦頗る厚かつたもので、今尚ほ当時の先生をば敬慕して忘るゝ能はざるものである」⁽⁴²⁾。

上級生と下級生との関係についても、前記の唐沢富太郎が言うような従来の見方とは異質な回顧を見出すことができる。

「明治十九年、文部省令の改正によつて師範教育が一変しました。当時の師範教育のモットーは従順・威重・親愛の三項でした、そして万事軍隊的で教師や上級生に対する時、命令伝達の際などは直立不動の姿勢でした。現在の師範生活と比較して真似のできないことは上級生が下級生を愛し、下級生が上級生を尊敬するといふ一事です。上級生が下級生を私用になんてことはひとつありませんでした。まして下級生に制裁を加えるとか訓戒を与えるなどは夢想だにせぬことでした。当時の教授法は教科書よりも口授が主で授業時間中は鉛筆で筆記し、あちから毛筆で清書していました。下級生がすすんで上級生の清書を手伝つてくれてゐたのは親愛の生きた証拠でした」⁽⁴³⁾。

また、森が採用した師範生の生活品の一切を学校から支給するという制度は、師範生たちにたいへん好評であった。

「十九年九月尋常師範学校と改称せられた当時は被服食料学用品の外更に毎月大枚壹円づゝの給与を受けた。斬髪料やカフ（公認の喫茶店）に行つても二銭か三銭あれば沢山である。米は一升五銭位であつたから今の五円位には使はれた、優遇である。牘鼻褌一本で来い——校長能勢先生は訓話された。「本校は国民教育の重任を担ふべき教育する学校だから国家も亦非常によく生徒を待遇する様に規定してある。本校生徒は入学を許可せられた暁には何も要せぬ褌一本で来い」と中には給与金の幾分を郵便貯金として不時の用に立てた人もあつた」⁽⁴⁴⁾。

「私の在学当時は総て官費で教科書と参考書だけは貸与されたが、学用品・被服・賄其の他休暇に帰省する旅費まで全部給与された尚其上毎週土曜日には手当として金十銭を給与された。今十銭と言へば僅かなやうに思ふが当時は物価が安く米一俵参円以内、一銭あれば饅頭や大福餅が三つも四つも喰へる時節であつたから中には家から小使を貰はずに此の手当で万事を間に合はせた者もあつた位である。それから面白い事には給与された学用品や、シャツ、ズボン下、靴下、靴などの被服品などが余れば学校がそれを割引して買上げる制度があつたので、生徒は学用品や被服類を大事に使用し節約して買上げを求め相当の収入を得、中には貧苦の親に送金し慰めたと云ふ美談もあつた」⁽⁴⁵⁾。

「給与品も頗る豊富で、衣食、学用品は勿論、一週間金十銭宛の手当を給した。然し当時の金十銭であるから、小使としても十二分であつたので、生徒教養上其の中金七銭は強制的に郵便貯金をなさしめた位であつた」⁽⁴⁶⁾。

「改正規則によつて生徒の学費は全部官給、被服類・教科用図書・学用器具・寝具・食器医等まで悉く貸与、消耗品たる筆・紙・歯磨・楊枝・糸針の末に至るまで一切之を支給され、使用に余裕ある有様であつた。病気の時の治療代も官給で、一週間に十銭づつの手当を給され、又夏冬休業中の帰省には其間の食費まで給与されたものであつた。其優遇方は実に感謝

に余りある程で、体一つ持つて行けば何一つ不足なく修学が出来た幸福さであつた」⁽⁴⁷⁾。

第2節 森有礼の来校

森は文部大臣時代に東北から沖縄に至るまで通算 157 日間の教育巡視出張を行なつて、中央政府の意志を伝え、各地の民情を視察した。その日程は次の通りであつた。

1885（明治 18）年 4 月 6 日～5 月初旬：近畿・四国地方

1885（明治 18）年 10 月 21 日～11 月 3 日：新潟県地方

1885（明治 18）年 12 月 19 日～12 月 20 日：埼玉県

1886（明治 19）年 12 月 25 日～1887（明治 20）年 3 月 4 日：近畿、九州、沖縄地方

1887（明治 20）年 4 月 20 日～4 月 21 日：埼玉県

1887（明治 20）年 6 月 16 日～6 月 26 日：宮城県、福島県

1887（明治 20）年 10 月 19 日～11 月 30 日：北陸、近畿、東海地方

1888（明治 21）年 10 月 4 日～11 月 6 日：東北地方⁽⁴⁸⁾。

森が各地の師範学校に来校した際のエピソードを師範生たちは以下のように書き残している。

「明治廿年の頃かと思ふ第一地方部の師範学校長を招集して森文部大臣は自ら之を引率して各師範学校を巡視し批評を加えたり、此時第一は兵式体操即ち柔軟体操、各個教練及中隊運動などを見て其優劣により学校は視察せずして判定出来るといふ位に重せられ且又視察と共に各師範学校長の面前にて各校の優劣を論評せらるゝ故校長連は戦々競々たるものあり」⁽⁴⁹⁾。

「私共二年生の時、英語の時間に、前申した森文部大臣が巡視されました。折柄、私はロングマンの第二リーダーの第十二章を読まされまして、教はつた通りにレッスン・ザ・ツエルヴスとやりました。スルと大臣は偉大な体を私の方にズーツと歩み寄られ、読本を覗き込まれまして、レッスン・ツエルヴと読めと申渡されました。ナンバー・ツーなどと言ふ例に比べて見れば、大臣の言はれる通りにすべきことは分り切つた話しであります、私共の先生は、第一課第二課と読む日本流から翻訳されたので図らずも、イギリス仕込の大臣から、一喝を見舞はされて、頗る御当惑になつたので御座います。その後、この先生は私共の難問に苦まれて遂に教場でお泣きになつたり致しました」⁽⁵⁰⁾。

「今日は生徒諸君にお話をするのではない。教員諸君に話す」という前置で「高の知れた師範学校の一教師が教室で、古今東西に比類のない大聖孔子様のことについて、かれこれ批評し論議することは、実におこがましいことである。以後十分注意すべきである」と鋭い一矢を放たれた。それは根本莞爾先生の倫理の授業を参観されての批評であつた。われ等が「ゴツト」と尊敬してゐた根本先生に対するこの批評は異様の感を与えた。その他ことごとく先生方の批評のみであつた。農学士で英語の授業のよかつた斎藤万吉先生も、大臣にかかつて

は一たまりもなく、『君、どれ貸したまへ。そんな教え方ではいかん』と英語の本を取りかえして読んだという事だ」⁽⁵¹⁾。

「明治二十一年の秋故森文部大臣始めて秋田を巡視せられた時を思へば奇抜なことばかり浮び出づるのである。当時大臣の威勢と云ふものは現代の考へからとても想像のつかないほど偉大なもので知事を始め校長教員悉く昼夜大心配したさうだ。庵地校長の如きは大臣の送迎や先導や応対に焦慮して一週間秘結してあつたなどの話柄を聞いたやうだ。愈々十月廿二日大臣着秋の日となつて職員生徒一同隊伍堂々寺内の旧招魂社まで出迎へた。私と尾形君と佐藤君と三人は小隊長で例の指揮刀一本といふ武装で威張つたものである。招魂社前まで行くと大臣着まで余程時間があるので翌々日大臣の高覧に供すべき演習の下稽古を招魂社の境内に試みた。……翌廿三日には学校の教授、兵式体操及び機械体操を視察あり、兵式の熟練と機械体操の巧妙には舌を巻いて賞賛せられたが、附属小学校に至り教生の実地授業を視察せられた時、私等の同級生齋藤勝平君が某級の作文教授中日用往復文の内『失礼ながら御願云々』の文字を教へたるに、大臣嚇然として怒り生徒の面前にて自らその教案を指頭でつき出し失礼のことを人に頼むことやあるとて大喝一声無用の文字を弄するを叱責されたるには齋藤君は勿論、先導したる校長も教師も一言の返答も出なかつたさうである。又寄宿舎生徒賄当番事務所を視察してその帳簿が和式なること、珠を使用し居ること、を見てこんなものを使用するは迂闊千万なりと携へたる仕込杖にてほきゝゝつゝ、かれ皆々恐縮して色を失つてあつたとのことである。悉く巡視を終へられてから職員生徒一同を講堂に集めて大臣から厳格なる訓示を与へられた。例の仕込杖を携へたまゝ、中央の壇上に立つて白髪赫顔眼光炯々舌頭火焰を吐き滔々数千言を述べられた。要は迂遠を去り自立自営を以て世の中に立ち他力にすがると戒められ、次に人の師表となるべきものゝ心得を諄々と訓へられてあつた。今尚明瞭に頭脳に彫り付けられて居る。翌年二月十一日憲法発布の大典を行はせられた日森文部大臣は凶刃に斃れたとの電報が夜に入りてから達したことを耳にし一同一掬の涙を濺いであつた」⁽⁵²⁾。

第3節 校長の個性

森有礼文政期の師範学校政策は森の思想的個性を強く反映していたが、各地の師範学校関係史料には、個性的な校長についての記述がみられる。校長の個性は師範生の生活のあり方を左右するものだった。

「種子島校長は教育家と云ふよりは軍人と云ふ側の人にて十六歳の少年時代に郷里の鹿兒島を出て鳥羽伏見の実践に参加し膝関節に負傷をして居らるゝ人でありまして、兵式訓練に重点を置き殆ど軍隊同様に訓練せられました。勿論校官は四師団より宮永大尉以下少尉、軍曹等でありまして、寄宿舎内の規律整頓等は軍隊以上でありとて全国的に有名であつた為に全国各地よりの参観者絶えざりき。勿論射撃等も八連隊の練兵場にて実弾射撃をやつたもので

す。軍歌も『吾は官軍我が敵は』を習つたものです」⁽⁵³⁾。

（長野県尋常師範学校校長・浅岡一の講演から）「在る夜急に学校に来て舎監に提灯をつけさせて舎内を廻つてみた。すると彼処でも此处でもトランプや骨牌を人の机の上でやつて居る。ねそべつてゐる者もあれば、歌つてゐる者もあり、なかゝ、遊んで居る者が多いので、すぐ様舎監室へ引張てきてひどく叱つて、其晩は帰して私も帰つてしまつた。舎監は驚いた。多分校長があんな事をして生徒と喧嘩でも始めては困ると思つたのであろう。翌日は生徒一同を講堂に集めて一場の訓話を試みた。「君等はよく自分で考へて見よ、男らしく議論すると云ふなら議論もしよう、然ししようと思はん、君等の心中は聞かずとも判つてゐる。これからは今度文部省から出た新制度によつてやつて行くが従ふと言ふ者は出るがよい。従ふことがどうしてもできぬと言ふなら退学するがよい。こんな規律に従ふ事が出来ぬと言ふ様では将来教育者となることは到底望まれない。それよりも寧ろ退学の方が余程気がきいてゐる。通常なら退学するについては学費弁償を要するけれど今回だけはそれもさせまい。併し一身を処するといふことは中々むづかしいものだ。すぐ返事をせよとは言はぬ、今日は授業をしなくともよい、二日一晚熟考の暇を与へる。よく考へて見て明日の夕刻までに銘々返答せよ」と言ふだけ言つてその日は授業もしなかつた。扱翌日になると早朝から皆揃つてやつて来て『今後はどんな厳格な規則でも守るからどうかやつて下さい』と言ふ。退学を申し出る者は一人もないとの事である」⁽⁵⁴⁾。

「田中敬一校長は明治二十三年（1890年）二月二十五日に学校長心得となり、九月二日に学校長に任ぜられた。当時の師範教育は軍隊式教育が行われ、舎監二名も予備曹長や軍曹で、すべて厳格な規則をもって機械的に律せられ、その結果、生徒は意気揚がらず陰鬱で何となく暗い感があつた。新校長は体軀肥満、沈重悠揚として迫らざるを思わせ、とくに眼眸に愛あり、唇辺に威あり、深遠穆々として真に生徒の敬事すべき師父として仰がれた。講堂に職員生徒を集めての第一声は、生徒の自治的精神の涵養と自由の尊重であつた。衆生は歓声をあげ、冬去り春来る……と明るい雰囲気が出た。

【物品給与を現金給与】当時生徒の被服類、学用品類等すべて官費で一定の物品を一定量の給与であつた。過不足が生じて剰るものは濫用したり、市に持出して物と交換したり、窃かに売るものもあり。足らぬものは不便を忍ばねばならず、実際に則せざる不便の制度であつた。田中校長は之を知るや其の筋の異議を排して、学用品類や靴下などは直に現金給与と改められた、これがため、生徒は靴下の如きも寒暑の適応品を用ふことを得て、大に生徒の謳歌する処となつた。

【外出日の増加と校外倶楽部】日曜日以外は外出が出来ず、一週間は外界と隔離生活であつた。所用を弁ずることも六ヶ敷、浩然たる心機も出来ず、情気や鬱気が累積して活気を損じ、学習上にも影響ありと見て、更に水曜日放課後も自由外出となつた。又春秋季に於て校外出遊佳適の日には臨時に外出を許したり、特に盛夏溽暑の夜などは、舎監引率の下に

藍川の澁に涼を尋ねて美しき晩景に接せしむるなど、人性自然の情操的教育に留意せられたのが多かつた。又校外倶楽部を設けられ、碁、将棋盤やカルタなどを備へ置き、外出日は其処へ菓子屋が出張した。尺八や月琴の合奏もあつたり、おのがじし娯楽を尽くしたものである。校長の誨へは能く勉め能く遊べであつた。爰に又一事の特記すべきことがある。毎年七月十日頃から八月夏期休暇で生徒の帰郷するまで約二週間は午後は授業もなく、然かも暑くて日の長いことであるから正午から一時半迄は私服に着換へて寢室で休息することを許された。サー皆は一斉に浴衣を買ひに走り俄かに寛闊な伊達姿で休息した。然し之がために惰眠を貪り或は風紀を乱す如きことは豪もなく、皆校長の苦心を感謝して相戒めて能く規律を守り、一段と元気を増進し、性気を旺盛ならしめた効があつた。今日では官衙や銀行、会社等に於て実に思切つた新しい教科であつた。

【生徒の学力増進と東京修学旅行】生徒の向学心を旺盛にし以て学力の増進に努力せられた。職員の更迭を行ひ学殖富贍の良教員の補充があつた……又校長は生徒の見聞を弘むるべく留意せられ、明治二十三年四月東京上野に第三回内国勸業博覧会の開催を機として窃かに東京修学旅行を企画し、同年一月之が発表されるや生徒は総拍手であつた。往路は四日市港から汽船で横浜へ、帰路は汽車であつた。海陸旅行の経験を与へられたものである。東京では宮城拝観、博覧会観覧、学校や名所などを巡訪し、又往路海上より大島の噴煙、鋸山の奇峯、下田港など指呼の間に望見し、帰路車上よりは初めて富士の霊峰を仰ぎ沿道の風物を参察僅かに往復一週間の旅程であつたが、之がため廓然として気宇を大にし知見を恢弘し、各自が一新生面を展開した感があつた。当時地方から師範生の東京修学旅行は之が嚆矢であり、我田中校長が先鞭を附けられたものである。

【天長節の祝賀と余興】

天長節の奉祝にも校長は新意を出され、吾々は実に当日の佳節を楽しみ迎へたものである。先ず御真影拝賀式を厳肅に行い、次に校庭で盛な運動会を催され、余興として自習室や寄宿舎には、各自思ひ思ひの趣向を凝らした作り物を飾り、之を市民にも開放せられ、校内は押すな押すなでヤンヤの大喝采を博した。今と違い其頃では、コンナ事は極めて新しく珍しいので、師範学校の天長節余興は市内で評判の呼び物であつた。其の夜は雨天体操場に筵を張り毛布を敷いて大祝賀会を挙げられた。校長初め職員全部は必ず皆家族を帯同して列席し生徒と会合するのである。中には若い婦人や又夫人の妹さんなども交じられ、異彩を放つものがあつた。御馳走は赤飯、関東煮、すし、さつま汁等で酒は無かつた。席上で必ず職員や生徒の余興がある。……校長は終始ニコヤカに之を見て生徒と偕に俱に楽みに堪へざる状貌である。斯くて時の更くるに及び解散となるや、生徒は総起立で校長を胴上げして玄関まで送り出すのである。此の間渾然たる一大家族であり、春風肅々和氣藹々として師弟間の情誼の濃やかなること今も猶愉悦の思出である」⁽⁵⁵⁾。

(未完・以下、次号に続く)

註

- (1) 野口援太郎「明治十九年以降の師範教育の変遷」(『教育五十年史』、国民教育奨励会編、国書刊行会、1981年、366頁(初出は、民友社、1922年))。
- (2) 同上、371頁。
- (3) 同上。
- (4) 同上。
- (5) 藤原喜代蔵『明治教育思想史』、富山房、1909年、313頁。
- (6) 唐沢富太郎『教師の歴史 教師の生活と倫理』、創文社、1955年、48頁。
- (7) 同上。
- (8) 50頁。
- (9) 53頁、66頁
- (10) 「母校の六十周年に当りて」明治19年卒業 天野永蔵(『創立六十周年記念誌』静岡県静岡師範学校同窓会・有信会編、静岡県静岡師範学校、1935年、14頁)。
- (11) 「五十年前の回顧」明治23年卒業 石垣直次郎(同上、18頁)。
- (12) 「母校追憶記」明治18年卒業 諏訪丑蔵(同上、12頁)。
- (13) 「回顧五十余年の五もく寸史」明治22年卒業 尾形咲作吉(『創立六十年』秋田県師範学校編、秋田県師範学校、1933年、162頁)。
- (14) 「回顧五十余年の五もく寸史」明治22年卒業 尾形咲作吉(『創立六十年』秋田県師範学校編、秋田県師範学校、1933年、164頁)。
- (15) 「歴代校長の面影と校風の変遷」(『福岡師範学校創立六十年』福岡県福岡師範学校創立六十周年記念会、1936年、140頁)。
- (16) 『愛媛同窓会報告』、第208号(『愛媛大学教育学部百年史』、教育文化出版教育科学研究所、1984年、89頁)。
- (17) 「思出の二三」明治25年卒業 大平慎一(『創立六十周年記念誌』静岡県静岡師範学校同窓会・有信会編、静岡県静岡師範学校、1935年、22頁)。
- (18) 「回想四十五年」森脇村次郎(『島根県近代教育史』島根県教育庁総務課、島根県近代教育史編さん事務局編、島根県教育委員会、1978年、1032頁)。
- (19) 「茫洋たる思ひ出」明治24年7月卒業 片岡隆起(『北海札幌師範学校五十年史』、北海道札幌師範学校編、1936年、237頁)。
- (20) 『岩手近代教育史』第1巻、岩手県教育委員会編、岩手県教育委員会、1981年、1050頁。
- (21) 『百年史』、埼玉大学教育学部百年史編集委員会編、百年史刊行会(埼玉大学教育学部内)、1976年、167頁
- (22) 『創立六十周年記念誌』、山梨県師範学校、201頁)。
- (23) 「埼玉県尋常師範学校第六年報(明治21年度)」(『百年史』、埼玉大学教育学部百年史編集委員会編、百年史刊行会(埼玉大学教育学部内)、1976年、91頁)。
- (24) 『石川県教育史』第1巻、石川県教育史編さん委員会編、石川県教育委員会、1974年、692頁。
- (25) 『岩手大学教育学部百年史』、教育文化出版教育科学研究所、1983年、157頁。
- (26) 『福師創立六十年』福島県師範学校編、福島県師範学校、1933年、45頁。
- (27) 明治22年仮入学 内田伊之助の回顧(『神奈川県教育史』、神奈川県立教育センター編、神奈川県

- 教育委員会、1971年、904頁）。
- (28) 『福島教育』、46号、明治32年1月（『福島大学教育学部百年史』福島大学教育学部百年史編纂委員会編、福島大学教育学部同窓会吾峰会、1974年、59頁）。
- (29) 「五十年前の思ひ出を書く」、明治27年卒業生 杉村信義（『奈良県師範学校五十年史』奈良県師範学校編、奈良明新社（印刷）1940年、671頁）。
- (30) 「回想録」露口悦次郎『愛媛同窓会報告』、第208号（大正14年）（『愛媛大学教育学部百年史』、教育文化出版教育科学研究所、1984年、83頁）。
- (31) 「追懷録」明治25年卒業 片山泰治郎（『創立五十年記念』、岡山県師範学校同窓会、120頁）。
- (32) 「感想」明治26年卒業 板谷浩（同上、123頁）。
- (33) 「回顧五十余年の五もく寸史」明治22年卒業 尾形作吉（『創立六十年史』秋田県師範学校編、秋田県師範学校、1933年、169頁）。
- (34) 「五十年の回想」稲田春治（『兵庫県御影師範学校創立六十年史』兵庫県御影師範学校同窓義会編、兵庫県御影師範学校同窓義会、1936年、461頁）。
- (35) 「試験生」下仲幸吉（同上、466頁）。
- (36) 「奈良県師範学校在学当時の懷古録」明治25年卒業 服部教一（『奈良県師範学校五十年史』、奈良県師範学校編、奈良明新社（印刷）、1940年、662頁）。
- (37) 「学友」（大正2）、佐藤寅次郎の回顧（『信州大学教育学部 九十年史』、信州大学教育学部九十年史編集委員会編、信州大学教育学部創立九十周年記念会、1965年、445頁）。
- (38) 「思へば懷し在学习当時」明治25年7月卒業 小川幸太郎（『北海道札幌師範学校五十年史』北海道札幌師範学校編、北海道札幌師範学校、1936年、240頁）。
- (39) 「回顧」明治22年卒業 戸崎順治（『創立六十年』、秋田県師範学校編、秋田県師範学校、1933年、170頁）。
- (40) 「思へば懷し在学习当時」明治25年7月卒業 小川幸太郎（『北海道札幌師範学校五十年史』北海道札幌師範学校編、北海道札幌師範学校、1936年、241頁）。
- (41) 「追懷録」明治25年卒業 片山泰治郎（『創立五十年記念』、岡山県師範学校同窓会、124頁）。
- (42) 「在学习当時回想録」明治22年3月卒業 佐川森之助（『創立六十年』秋田県師範学校編、秋田県師範学校、1933年、154頁）。
- (43) 『大分新聞』昭和5年11月1日（『大分県教育百年史』大分県教育百年史編集事務局編、大分県教育委員会、1976年、620頁）。
- (44) 「明治二十年頃の生徒生活」卒業生 長沢清太郎談（『福師創立六十年』福島県師範学校編、福島県師範学校、1933年、40頁）。
- (45) 「思へば懷し在学习当時」明治25年7月卒業 小川幸太郎（『北海道札幌師範学校五十年史』、北海道札幌師範学校編、北海道札幌師範学校、1936年、239頁）。
- (46) 『創立六十周年記念誌』、山梨県師範学校、324頁。
- (47) 『栃木県教育史』、栃木県教育史編纂会編、栃木県連合教育会、1957年、17頁。
- (48) 『森有礼全集』、第1巻、宣文堂書店、1972年、153頁。
- (49) 角田伝「七十余年の回顧」第三（『群馬県教育史』第1巻、群馬県教育史研究編さん委員会編、群馬県教育委員会、1972年、485頁）。
- (50) 明治20年入学 桜井寅之助の回想（『岐阜県の師範学校教師たちの学校 その歩みと岐阜大学教

育学部』、教育文化出版教育科学研究所、1985 年、20 頁）。

- (51) 『福島県教育』、1934 年 9 月号（『福島県教育史』第 1 巻、福島県教育委員会編、福島県教育委員会、1972 年、574 頁）。
- (52) 「在学当時回想録」明治 22 年 3 月卒業 佐川森之助（『創立六十年』、秋田県師範学校編、秋田県師範学校、1933 年、151 頁）。
- (53) 明治 23 年卒業生 井岡万一郎の回想（『奈良県師範学校五十年史』、奈良県師範学校編、奈良明新社（印刷）、1940 年、659 頁）。
- (54) 「学友」（大正 2）、浅岡一の創立四十周年記念講演（『信州大学教育学部九十年史』、信州大学教育学部九十年史編集委員会編、信州大学教育学部創立九十周年記念会、1965 年、445 頁）。
- (55) 『岐阜県の師範学校教師たちの学校 その歩みと岐阜大学教育学部』、教育文化出版教育科学研究所、1985 年、28 頁。